

第2回 目黒区生物多様性地域戦略（仮称）策定検討委員会次第

日時 平成25年4月13日(土)
午後2時00分から
場所 北部地区サービス事務所
第1・第2会議室

- 1 開会 委員長
 - (1) 傍聴及び議事録について
 - (2) 委員の出欠について
 - (3) 事務局からの連絡

- 2 議事 委員長
 - (1) 第一回策定検討委員会の意見と検討事項の確認

 - (2) 基本目標について（基本テーマと目標設定）

 - (3) 施策の方向性（施策の方向性と柱立て）

 - (4) 懇談会の開催に向けて

 - (5) 「80選のいきものたち(仮称)」の作成について

 - (6) その他

- 3 第3回目黒区生物多様性地域戦略（仮称）策定検討委員会の日程について

以 上

(会議配布資料)

- 資料1 (1) 第1回策定検討委員会の意見と検討事項の確認 ※
- 資料2 (2) 基本目標について (基本テーマと目標設定) ※
- 資料3 (3) 第2回目黒区生物多様性地域戦略(仮称)策定検討委員会資料集
3-1 施策の方向性 (施策の方向性と柱立て)
3-2 時が培う 目黒区の生物多様性 (A3版)
3-3 地域戦略の体系 (A3版)
- 資料4 (4) 懇談会の開催に向けて
- 資料5 (5) 「80選のいきものたち(仮称)」の作成について

(その他資料)

- 資料6 平成24年度の各種調査結果(抜粋)
- 資料7 生物多様性に配慮した商品のエコラベル等について
- 資料8 愛知目標と目黒区の関連性
- 資料9 意見の追加提出用紙

・ 目黒区生物多様性地域戦略(仮称)策定検討委員会名簿

・ 第1回目黒区生物多様性地域戦略(仮称)策定検討委員会 会議録 ※

(参考パンフレット類)

- ・ 目黒区作成パンフレット
『家庭から始める温暖化対策。「だれか」ではなく「わたし」から大作戦』
- ・ 国際自然保護連合日本委員会作成パンフレット
『地球に生きる生命の条約』、『にじゅうまるプロジェクト』
- ・ 国連生物多様性の10年日本委員会事務局作成リーフレット
『IKI・TOMO vol.3』、『MY行動宣言』

※印:事前配布資料

以 上

(1) 第 1 回策定検討委員会の意見と検討事項の確認

ア 目黒区原風景をどのように扱うか

1) 検討委員会での発言要旨

○目黒区周辺の本来の森林の姿は常緑樹林であり、これもふるさとの風景であると思う。雑木林だけではなく、鎮守の森のような常緑樹林も加えてよいのではないか。

○自然を回復するというときに、どの自然に回復するのかという問題もある。

○人間がいない状態に戻すことはできないので、人間にとって住みやすい環境も考慮に入れて今後の議論を進める。

○都市部では、生物の入れ替わりも起きており、人為的な(人のかかわり方の)影響の良否は、増えた鳥の種類や、減少した種がいないかなどを慎重に分析する必要がある。

2) 検討の方向性

→人の手で育まれてきた環境(風景)も含め、多様な環境が混在していることも都市の自然特性としてとらえる

①目黒区が目指す自然との共生の在り方を考える。

②回復目標の時代の想定。 →80年前、昭和初期を想定。

※この時代に戻るということではなく、人と自然のかかわり方などの基準点とする。

③常緑樹林の価値を再検討する。 →下表の環境区分を設定する。

④人間にとって住みやすい環境と生物多様性が確保された環境とのギャップを検討。

⑤植物については、植栽された樹木、園芸種も、目黒の郷土種として考えていく。

参考 目黒区の自然を知るための7つの環境区分

	環境区分※	コンセプト	具体例
1	庭地	小さくても多様ないきものが賑わうみどり。多種の植物。陰陽・乾湿の環境	目黒区全域の住宅地
2	小さな水辺	いきものたちのゆりかご・ビオトープ	学校等のビオトープ
3	屋敷林	住宅地にみどりの島のように残る樹林	古民家、都市緑地
4	草はら	原っぱ・草地・野の風景。畑	中目黒公園、東京大学
5	雑木林	手入れによって伝えられる林	駒場野公園、菅刈公園他
6	都市の森	大きな樹林地・大木のある公園(崖線のみどり)	駒場地区、林試の森、街の森(みどりの基本計画)
7	広がりのある水辺	川・池—海とつながる川と池	目黒川、呑川。碑文谷池、清水池。駒場野公園の田んぼ

※環境区分：「いきもの気象台観察ノート(2011年目黒区発行)」より

《アンケート等の意見》

○人工の緑に頼らず、自然環境を出来るだけ残すよう努力すべき。もともとそこに在来(固有)の生き物を、そのまま保護していくのが、あるべき姿だと思う(中目黒公園イベント参加者)

○調査などもっと必要である(駒場野公園ボランティア活動参加者)

○植栽の樹木であったとしても緑化をした場所であれば、生物にとって住つく環境が出来てくる(駒場野公園ボランティア活動参加者)

イ 生物多様性をどう評価(計る)するのか。指標をどうするか

1) 検討委員会での発言要旨

○生物多様性をどのように計るのか？

○50種の指標生物について住民参加で継続調査しており、一定の変化がつかめる。

○日本の生物多様性総合評価(JBO)というのがつくられている。

○複数の指標により現状を把握し、計画を策定することとなる。

○いきもの气象台観察ノートの生き物の観察記録が参考になるのではないかと。

○これだけの種についての長期間のデータは現状や傾向の把握に非常に重要である。

2) 検討の方向性

→**親しまれている身近な生物について、これまでのデータを活用して指標化を図り、生物多様性の評価を行う。生物以外の指標も検討する**

①現状の仕組みにおいて把握し得る指標の抽出を図る

②JBOの活用価値、あるいは関係性の整理

③象徴的指標の整理

④観察時の留意点の整理

⑤消費行動など、生物種以外の指標も検討する

⑥外来生物の扱い →指標のひとつとしていくことも可能

参考 「みんなで選んだいきもの80選」 得票数ベスト8

順位	種名(得票数)	選んだ理由の一例
1位	ヤモリ(190票)	大好きな生き物のひとつ…窓レールの中に隠れていました。
2位	メダカ(137票)	童謡にも歌われている…日本の風景が目に浮かぶ。
3位	ヒキガエル(121票)	電柱の下にいるヒキガエル…心が和み、笑顔になれます。
4位	ソメイヨシノ(114票)	目黒川沿いの桜は区民として誇れる財産。
5位	アマガエル(109票)	少しでも自然環境が整えば、最初に戻ってくると思うので。
6位	スズメ(105票)	どこにもいそうな鳥が減少しているといわれる。身近ないきものが大切です。
7位	ツバメ(105票)	多年見つけて、心をいやされていますので。孫達にも見つけてほしい。
8位	シジュウカラ(101票)	巣箱でヒナがかえり外を飛んだシジュウカラ、とても感動でした。

2012年みんな選ぶめぐろのいきもの80選調査より

《こどもたちの意見から》

○もともと日本に住んでいる生き物たちが人間の自分勝手なことで外来種を放ったために、いまいる日本の生き物たちが、げきげんした。そんなことがこれ以上ないように努力する(東山小学校4年生)

ウ 目黒区が目指すべき環境像は？（生物多様性のイメージ）

1) 検討委員会での発言要旨

- ミクロの生物の世界では、大木1本にも生物多様性がある。このような多様性の保全も重要であると思う。
- 自由が丘の緑道に鳥が増えているが、(最近行われている)養蜂による人為的な影響とも考えられる。人が(自然に)どう手を加えるべきかが難しい。
- 教育園では地表性の虫やヒキガエルなど普通種が減少している。生態系の上位に位置するカラスが多いことの影響も懸念される。
- 大きな屋敷が取り壊され庭の緑が減少する事例もあり、個人宅の庭に依存している目黒区の緑は危機的な状況にあるといえる。

2) 検討の方向性

→ 一本の木、一鉢の花、身近な自然から生まれる「生物多様性にやさしい」暮らし・活動・まちを目指す

①何を守るべきか

大木、土壌生物、野鳥、伝統、里山の暮らし方、くらしの知恵…

②重要な戦略は何か

普及啓発、教育（初等教育は、生物多様性に配慮した暮らし方に作用する）、協働

③行動指針(施策)

我々の生活が、地域の生物多様性、さらに広範囲の生物多様性にどのように関係するかを整理する。特に重要と思われるものに限定し、掘り下げる。

《環境審議会の意見》

○取組みは良い。しかし、なぜ多様性が失われてきたのか、その原因も掘り下げる必要があるのではないか。

《アンケート等の意見》

- 自然界の生物との共生は難しい点多々あるが、人間の方から出来る限り水を汚さない、低農薬などで生物に優しい環境作りを心がける事で、お互いに暮らしやすい街に成長していけると思う(駒場野公園ボランティア活動参加者)
- 都会の生活環境との調和をどう考えるか(駒場野公園ボランティア活動参加者)
- カモが来る美しい目黒川にいつもなっていると良い(中目黒公園イベント参加者)
- 幼子の日々の暮らしに欠かせない、生き物が生き生きとする姿を近くで見せられる環境は大人や地域社会が気を付けなければならないと思ってきたが、自然クラブメンバーは自然に実践している(駒場野公園ボランティア活動参加者)
- 身近な所で生き物が見られる様な自然環境を整えればもっと生きものたちに親しくなると思う(駒場野公園ボランティア活動参加者)

《こどもたちの意見から》

- 地球を彩り、とても美しい風景を作ってくれてありがとう。見ているだけで心がなごむ。さまざまな種類のいきものがありますが、全てにかんしゃ(小学校4年生)

エ 生物多様性の教育・啓発

1) 検討委員会での発言要旨

- 都市では豊かな自然がある訳ではないので、啓蒙や教育などが重要になる。これが、郊外にある自治体との違いとなる。
- 子供にも自然のつながり（鳥と虫の関係など）を理解でき、実際の活動につながるようなものとしたい。未来を担う子供達に理解させることが重要である。
- 緑に触れる機会の少ない生活をしている方、関心のない方にも関心を持ってもらいたい。土地を持たない方もいるため、机の上で植物を育てるなどの発信も必要ではないか。
- 野菜や魚を買うといった消費行動にも生物多様性は含まれており、都市生活者がどのように自然の恵みを享受しているかを感じることも含めてほしい。

2) 検討の方向性

→**日々の暮らしの中で、特に子どもたちと自然の関りを再構築**

- ①原体験としてのいのちの大切さ、いのちのつながりの気づき
- ②日常の空間でのふれあいの機会と場の創出
- ③小学校、中学校等学校教育での取り組み
- ④消費活動、食育、地産地消等の取り組み

《環境審議会》

- 「戻ってきてほしい生き物」「未来に伝えていきたい」など前向きな捉え方をしているが、外来種等についてどのような対処をしているのか。
- 生物多様性というのは、外来種がいては駆逐され、多様性ではなくなる。生き物の数や種類を数えるのではなく、もっと区民に「捨てるはいけない」と啓発する事や多摩川の様にならなくなった生き物を入れる大きな水槽を設置するなどの措置をしてこそ生物多様性なのではないか。

《アンケート等の意見》

- まず、自然について知ることが必要だと思う。「自分は自然に生かされている」という認識。もちろん、たくさん触れ合うことも大切(小学校教員)
- 教室が昆虫園のようになり、たくさんのチョウを育てて羽化させた。一つのグループが、羽化に失敗し羽の折れたチョウを2週間ランタナの花を与えつづけて世話をしたが、子どもたちにとって生命を見つめるよい機会だった(小学校教員)
- いきものたちが、今現在どのように生きているのか、実態をきちんと把握させる。そこから「このままで大丈夫だろうか?」「何をどうしたら改善できるか」「そのために自分には何ができるか」と課題意識をもたせて学習を進める(小学校教員)
- 子供たちには、まず親がいきものにふれることから始まると思う。大人の親でも自然にふれやすいイベントがあったらいい(駒場野公園ボランティア活動参加者)

オ 生物多様性という文言について（代替できるやさしいことば）

1) 検討委員会での発言要旨

- 「生物多様性」に代わる言葉を作れないか？
- 一般の方に分かりやすい言葉でタイトルを付けてもよいのではないか。
「自然のめぐみ」などはどうか。
- 「人といきものが共生する街づくり」というのもよい。
- 「街づくり」など都市型であることをアピールする言葉が入っていた方がよい。
- これまで目黒区が使っている「いきもの」という平仮名での表現がよい。

2) 検討の方向性

→「生物多様性に替わるわかりやすい言葉」への転換

①いくつかの案を検討し、委員会の名称、地域戦略の名称等へ反映する。

(例示)

(計画の名称例)

ささえあういのち	→ささえあういのちの基本計画 ささえあういのち・いきもの基本プラン
つながるいのち	→つながるいのちの基本計画
自然のめぐみ	→めぐろ自然のめぐみの分かちあい計画
自然と共生	→人といきものが共生する街づくり計画 めぐろいきもの共和国推進計画
しなやかないのちの流れ	→しなやかないのちの流れを伝える基本計画
みんな心地よい	→みんな心地よいめぐろいきもの再生計画
いきもののにぎわい	→いきもののにぎわいとつながりの基本計画

②サブタイトルとメインタイトルの二つで表わす

メインタイトル 野鳥のすめるまちづくり (※資料2：計画のテーマ参照)

サブタイトル ささえあういのちの基本計画…等

③「まちづくり」の視点を入れる

(参考) 区の条例等で用いられる「みどり」について、生物多様性の視点で再定義する予定。

現行 目黒区みどりの条例(平成3年施行) 第2条

この条例において、「みどり」とは、樹木・樹林・生け垣・草花・草地及び水辺地をいう。

《アンケート等の意見》

○生き物は単独では生きられないこと、互いに結びつき必要としていることを学ばせる(小学校教員)

《こどもたちの意見から》

○ぼくたちはにんげん。きみたちはむし、とり、くさ、はな、き、さかな、きのこなど。ぜんぜんちがうけど、おなじいきもの(小学校1年生)

○ぼくたちと同じ命をもついきものたちを大切にしていきたい(小学校4年生)

カ エコロジカルネットワークの形成

1) 検討委員会での発言要旨

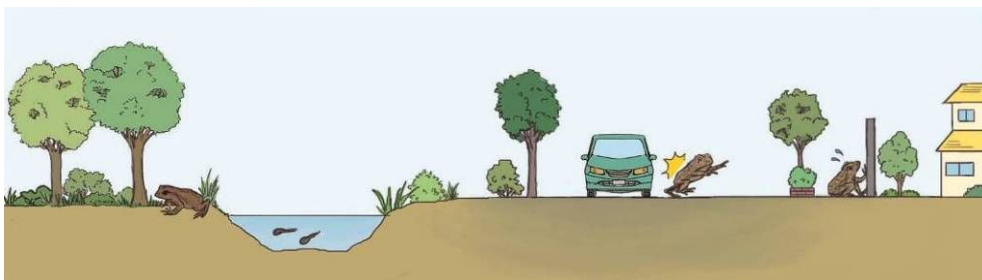
- 陸、水、空を利用する生物によって異なると考えられるが、全て同じように取り扱うのか、特定のものに着目するのか？
- 従来の考えでは、移動性が高い鳥による利用という視点で緑の配置を考えていた。
- モザイク状の緑の配置を考えてきたということか？
- 考え方の1つとしてあった。移動性の低い生物については別途考える必要がある。
- 鳥を保全することで他の生物も保全できるという考えということか？
- 目黒区の策定した「野鳥のすめるまちづくり計画」は、街づくり計画に鳥をシンボルとした生物の保全の視点を取り入れたものである。この中では区全体のエコロジカルネットワークの形成などは想定していないので、この委員会で議論する。
- 生物多様性としては全ての生物を取り扱うべきであるが、観察しやすいものを指標とせざるを得ない。区がこれまで指標としていた鳥以外に指標として想定されるものがあればご提案いただきたい。
- 鳥をとおして地域の自然や環境に視野を広げることも可能ではないか。

2) 検討の方向性

→野鳥やチョウをシンボルとして、広域から近隣街区、一人ひとりの足元までつながるいきもののネットワークの形成を図る

(※資料2:計画のテーマ参照)

- ①広域的なゾーンから、街区、個々の敷地にいたるまでのエコロジカルネットワークの形成を図る
- ②隣接区の動植物現況、活動施策のネットワークを抽出する。
- ③野鳥、チョウ、地表性昆虫などの指標を用いる。
- ④ネットワーク形成の阻害要因を抽出する。



例示 ヒキガエルの移動と生態ネットワーク形成の阻害要因（地面の不連続性）

《アンケート等の意見》

- 自然や生き物が身近にあり、自然や生き物と触れ合ったり観察できたりする環境が必要だと思う。その上で種まき、苗植え、収穫体験や、それぞれの花や樹木、生き物や虫など成長や特徴を知っていく必要があると思う(小学校教員)
- ビオトープを街なかを作る。小学校の中だけだと、校外の人は触れられない(中目黒公園イベント参加者)
- 緑道など、区の全体的に水辺を設ける(中目黒公園講座参加者)

エコロジカルネットワークの形成

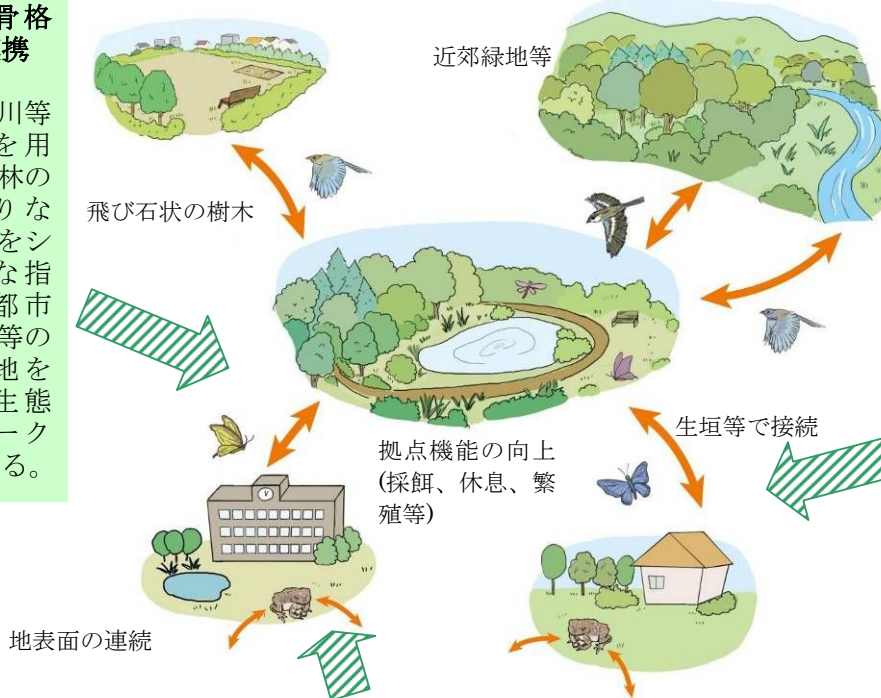
エコロジカルネットワークの形成イメージ
(目指すべき姿、施策の方向性などの検討)

◎区外中核拠点→区への導入

崖線の緑や河川等を移動軸とし、野鳥をシンボリックな指標としたネットワークにより、外部空間から区内までの線形の緑地(骨格的な生物の移動経路)の形成を図る。

◎区内の骨格 緑地間の連携

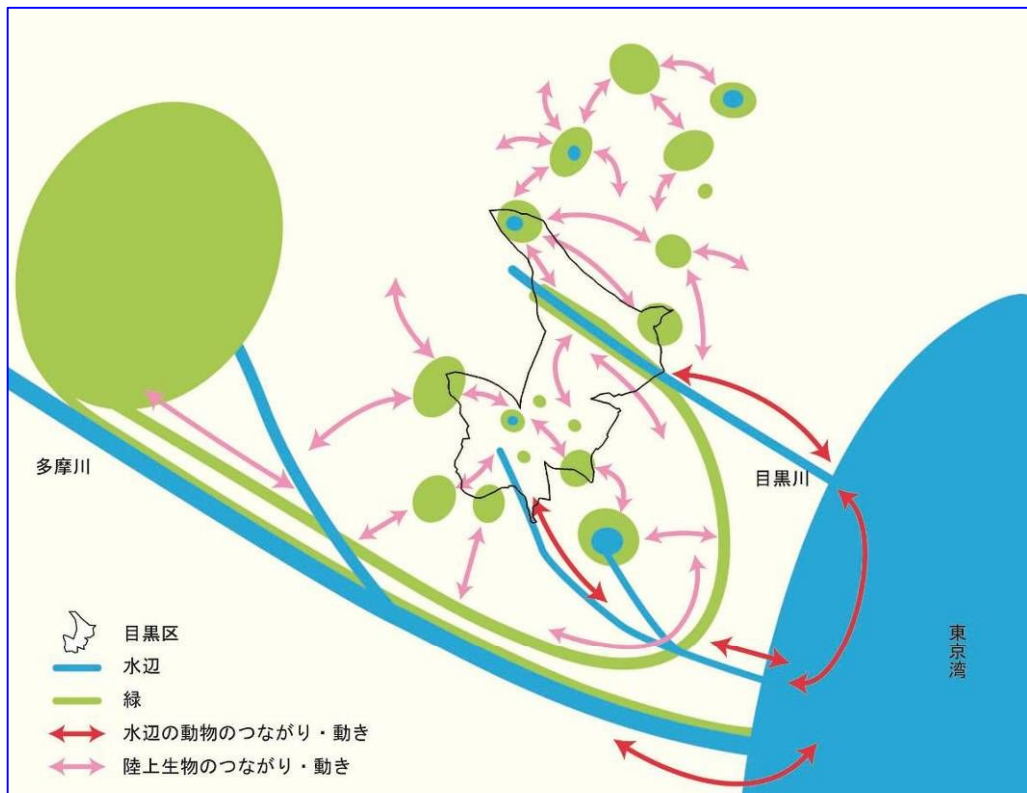
目黒川、呑川等の緑化軸を用い、既存樹林の保全を図りながら、野鳥をシンボリックな指標として都市公園、社寺等の拠点的緑地を核とした生態ネットワークの形成を図る。



◎拠点→街区

公園の整備、公共施設の緑化、接道部や屋上緑化など民有地の新たなみどりの形成を図りながら、チョウをシンボリックな指標として街区への面的な展開を図る。

◎**地表面の保全** 雨水が浸透し、落ち葉等の堆積があり、土壌生物による土壌の形成が図れる健全な地面の確保を図り、住居、学校等の施設等個々の施設で区民といきものふれあいの空間の形成を図る。



生態ネットワーク模式図

エコロジカルネットワークの形成(拠点の機能例)

○緑地・樹木の役割

オナガは、大きな樹林をすみかにして、周辺の大小様々な緑地を渡り飛び、えさをとっていることが示されている。

オナガ群が長時間滞在する緑地は、①面積が大きい、②小面積でも樹高が高い、③人の気配があまりないような緑地で、人間から一定以上の距離が保て、安心して採餌、休息できるような緑地である。また、④ゴルフ練習場周辺の緑地のように、ひとつひとつの面積は小さいが、いくつも集合していると大面積の樹林と同じように長時間滞在する。これら長時間滞在する緑地と緑地をつなぐものとして1本のカキや高木などの小規模な緑地の存在も重要であり、オナガの生息にとって必要不可欠と考えられる。

(1986:野鳥のすめるまちづくり計画策定時の野鳥生息調査報告より)

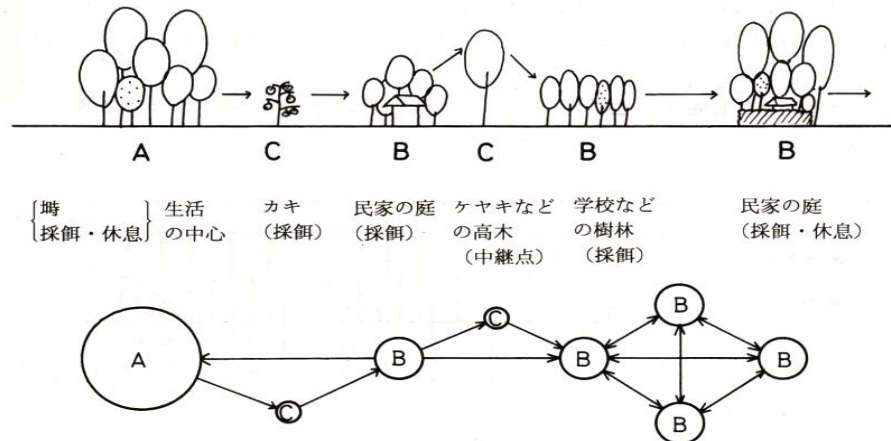
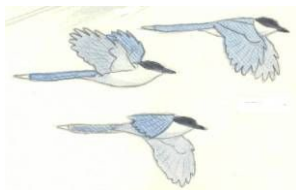
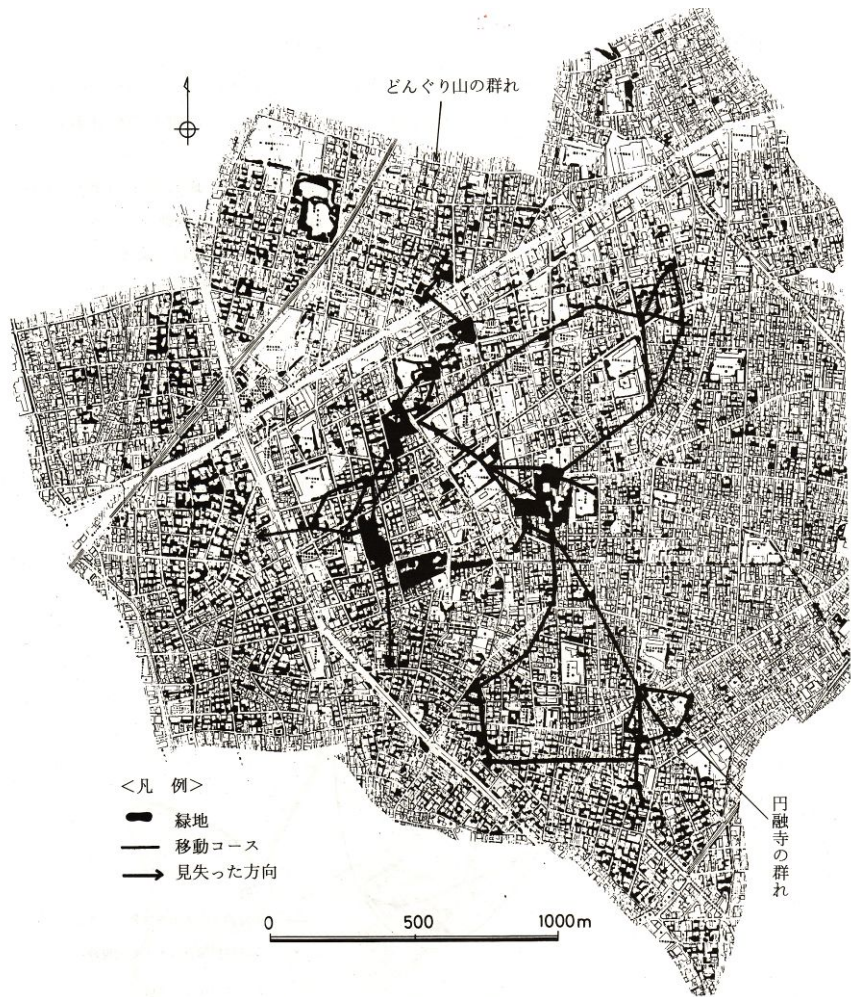


図 オナガの緑地地味パターン

(2) 基本目標について (基本テーマと目標設定)

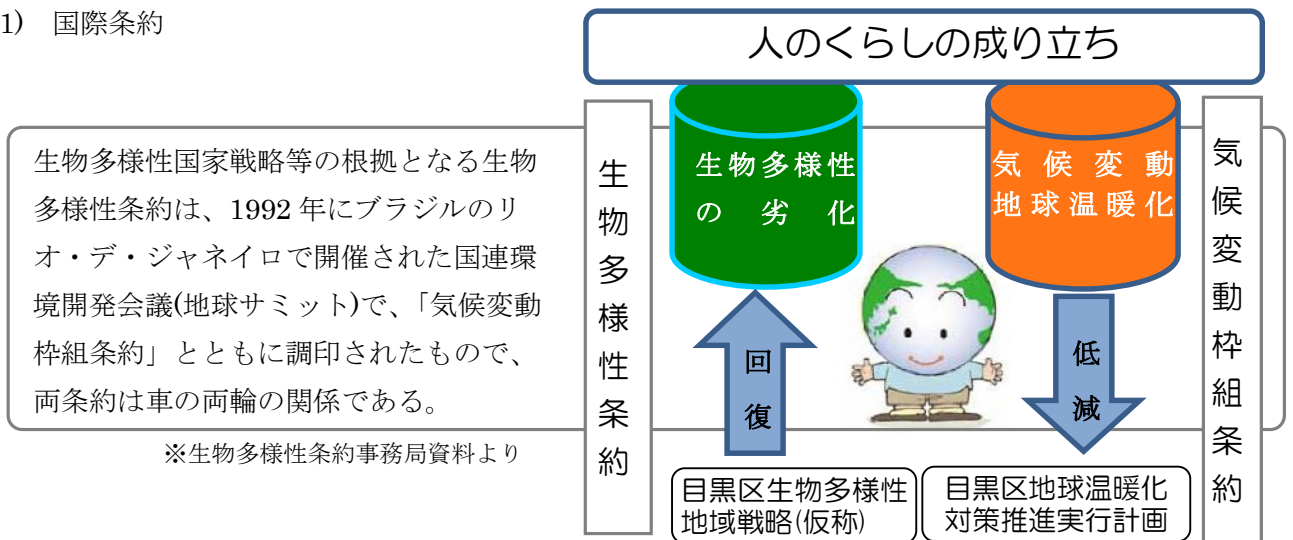
ア 計画の対象区域と期間

- 1) 対象区域：目黒区全域
- 2) 計画期間：概ね 50 年
 - 長期目標：基本構想(将来ビジョン)の設定
 - 中期目標：平成 44 年(2032 年) 目黒区制施行 100 周年 計画の改定
 - 短期目標：平成 32 年(2020 年) 部分改訂

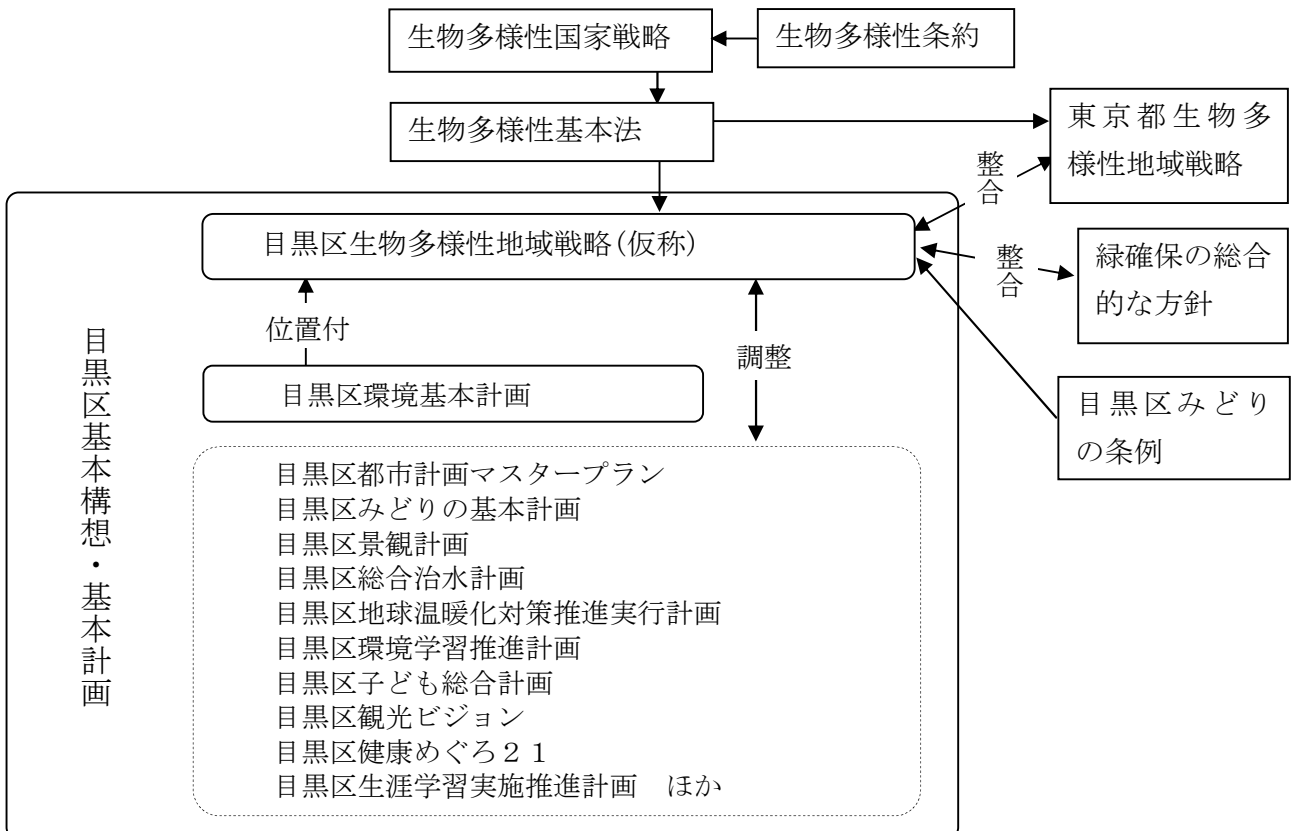
※2020 年は愛知目標及び東京都生物多様性地域戦略の目標年

イ 計画の位置付け

1) 国際条約



2) ほかの計画等との関係(案)



ウ 目黒区の生物多様性の現状例と主な課題（整理中）

分野	現状	課題
環境	<ul style="list-style-type: none"> 東京都では、市街地を中心にヒートアイランド現象が顕在化している。 区内の自然は崖線により奥多摩の山地とつながっている。また、目黒川、呑川等の河川をとおして東京湾の生態系ともつながっている。 緑被面積は昭和47年比で増加しているが、平成15年度における緑被率17.1%、農地面積3.4haと残された緑は多くない。緑被のうち87%が樹木緑被で、その約60%が民有地にある※2。 庭等の緑被が住宅地内にモザイク状に点在している。 宅地の細分化等による民有緑地の減少もみられる。 地表面の劣化と分断 地表の舗装・裸地化が進んでいる。 屋上・壁面緑化助成により4,619m²の緑地を創出。 公園等のまとまったみどり、社寺林、庭地や学校ビオトープ（17カ所）等の緑が拠点として点在している。 区内で2,956種の生物が確認されている。このうち169種が国又は都により絶滅の恐れがある種に指定されており、776種は外来、植栽、飼育等由来の生物である※3。 	<ul style="list-style-type: none"> 土地の不足 財政的な課題 学校ビオトープの管理・活用 公園等の緑の拠点の保全 住宅地、民有緑地等の街なかの緑の保全 原体験、環境教育、生涯学習の推進 屋上・壁面緑化推進 公園等の緑地の多様化 専門調査等モニタリングの継続 エコロジカルネットワークの強化
くらし	<ul style="list-style-type: none"> 区民の消費活動が、日本や各国の生物多様性に影響を与えている。例えば、米の消費により目黒区2.2個分の水田に間接的に影響を与えている（エコロジカルフットプリント）。 全ての人類が日本人と同じ暮らしをすると、地球が2.3個必要となる※1。 目黒灘など地域の伝統的な文化が受け継がれている。 区民は日々の暮らしの中で、季節の移ろいや身近な自然に親しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性の重要性の理解を高め、生物多様に配慮した消費やライフスタイルに転換するために区民、事業者等の意識を変える。 区民への消費活動と生物多様性のつながりの理解促進
活動	<ul style="list-style-type: none"> 1970年代に開始された公園等での花壇ボランティア（グリーンクラブ）は、80団体が活動している。 2001年に公園登録団体活動が開始され、菅刈・中目黒・碑文谷・東山公園等で11の団体がスポーツや自然保全活動等を実践。 駒場野公園では、自然クラブや地域等の参加で雑木林等の里山管理が継続されている。 区内の身近な歴史や自然を訪ねる延長約40kmのみどりの散歩道が設定され、コースガイドの普及等により区民に親しまれている。 区民参加による生物調査を実施している。 区内に4,222の団体が確認されており、3.2%の団体が環境保全・自然保護を主な活動分野としている※3。 さまざまな活動で、野鳥のすめるまちづくりを推進している いきもの住民会議、駒場野フォーラム、目黒川浄化対策三区連合等の協働事業を推進している。 	<ul style="list-style-type: none"> より活性化させるための広報活動 生物調査等への参加人数の増加 歴史的、文化的資源の活用・継承 協働の機会の創出

※1 生きている地球レポート2012（WWF ジャパン） ※2 緑の実態調査（H16年目黒区）

※3 目黒区いきもの住民台帳（平成22年目黒区） ※4 目黒区区勢要覧（目黒区） ※その他都市整備部事業概要等

エ 計画の基本方針

1) 地域戦略策定に向けた基本的な方針

- 生物多様性の大切さについて区民への周知を図る
 - 生物多様性の啓発とライフスタイルの変革に向けた取り組みを重視
 - 一人ひとりが理解し、参加のできる分かり易い内容
- 生物多様性の回復に向けた将来ビジョンを提示する
 - 具体的な行動目標の提示と様々な主体の将来ビジョンの共有
- 既存の事業等への生物多様性の視点を導入する
 - 歴史や活動、伝承を含め、目黒区の生物多様性資源を再認識する
 - 環境学習や街づくりの中に生物多様性配慮指針を導入する

2) 基本テーマ

目黒区は、住居系の用途地域が 8 割を超える住宅地を主体とした都市で、大規模な緑地は少ないが、庭や街角のみどりがその住宅地の中にモザイク状に点在しているのが特徴となっている。

野鳥はそれらの庭や街角を訪れ、人の身近な場所で見られている。そして、鶯の初音を楽しみ、巣箱に入るシジュウカラを観察し、駅のツバメの巣を見上げるなど身近な自然や季節を楽しむ区民の姿がある。

また、このような目黒区の特徴から 1986 年に「目黒区野鳥のすめるまちづくり計画」を策定し、現在まで継続して、自然と共生する街づくりの一環として推進している。

野鳥のすめるまちづくり計画では、野鳥を

- (1) 緑のネットワーク形成の指標
- (2) みどりの質的向上のシンボル
- (3) 住民に親しまれている環境のシンボル

として捉えている。

- これらから、目黒区の生物多様性地域戦略においても、「野鳥」を環境や共生、活動の指標やシンボルとして用いることとし、生物多様性の視点を加味する

3) 基本構成

ここの用語や構成は未定です

目黒区は、生物多様性基本法の理念に則り、東京都生物多様性地域戦略や国連生物多様性の 10 年との連携を図りつつ、「まもる」、「ふれあう」、「伝える」の 3 つの行動による構成で、効果的かつ効率的な施策を展開する。

環境(まもる) : 自然、みどり、生物、水、土壌、景観、生態系をまもり回復する

みどり・水辺の保全及び質・量の向上、ネットワークの強化等

くらし(ふれあう) : 自然に親しむ・ふれあう、学び・啓発・ライフスタイル

生物多様性の重要性の理解促進、ライフスタイルの転換、教育、啓発

活動(伝える) : 参加・連携・まちづくり

文化の伝承、人材育成、区民参加や事業者・NPO による調査等の促進

みどりや水辺の保全活動への様々な主体の参加、まちづくり

区分1 (環境) みどりの原風景をまもり、やさしさのある街をつくる

- 目標 1 地形・地勢を意識した風とみどりと生き物のネットワークづくり
※環境基本計画を受けての目標設定
施策目標：都市の生物多様性の確保の重点プロジェクト名
- 目標 2 緑被率を 20%へ
- 目標 3 公園面積を 2.0 m²/人に、将来的には 2.5 m²/人へ
- 目標 4 野鳥の年間確認種数 50 種以上を維持
※みどりの基本計画を受けての目標設定
- 1 みどりを守り育て増やしていきます (指標:緑被率を 20%へ)
 - 2 身近な公園など、みどりの拠点を整備します
(指標：公園面積を 2.0 m²/人に、将来的には 2.5 m²/人へ)
 - 3 生きものの生息に配慮した自然的環境を保全・創出・育成します
(指標：野鳥の年間確認種数 50 種以上を維持)

区分2 (くらし) ささえあういのちのまち 目黒のくらしを未来に伝える

- 目標 5 歩いて見る・知る・耕すくらし
＝歩くことから始める、未来に伝えるくらし方
※目黒区みどりの散歩道整備マニュアル
身近な歴史や自然を訪ねる「みどりの散歩道事業」事業からの目標設定
- 目標 6 学習の目標 振り返ること 学ぶこと 活かすこと

区分3 (活動) 人・いきもの・地球のつながりを深める

- 目標 7 みどりと人の交流を深める場を創出します
※みどりの基本計画を受けての目標設定
(指標：緑化推進組織等の育成)
- 目標 8

カ 目指すべき姿 将来ビジョン

概ね 50 年後の想定です

まもる (環境)

- 農地や樹林等の区内に残された貴重な緑が保全されている。
- 公園等の緑地や水辺では区民が自然と触れ合う活動が活発に行われている。
- 緑被率が 20%を超え、いたるところで緑を感じる、やさしさのある街が創られている。
- 目黒川の水質が改善され、区民が水辺のいきものとふれあうことができる。
- 生き物のネットワークが形成され、みどりの質(生物の豊かさ)が向上している。
-

ふれあう (くらし)

- 区民、事業者、NPO 等の様々な主体が生物多様性の重要性を理解し、生物多様性に配慮して行動している。
- 未来をになう子供たちが積極的に自然とふれあい、人の暮らしといきもの・地球のつながりを実感している。
-

伝える (活動)

- 目黒区の伝統文化が区民に認識され、次世代の担い手が育成されている。
-